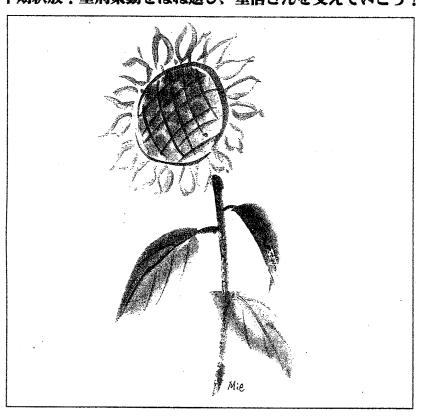
第91号 2009年8月31日 2009年8月31日

早期釈放!重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう!



目次

- P 2 七月八月の歌 重信房子
- P 3 独居より 総選挙、日本を変えるはじまりの一歩にしたいです 重信房子
- P11 重信さんとの交流コーナー
- P12 アラブ物語(3) ―リッダ闘争への道(1) 重信房子
- P18 読者からの声
- P19 シゲに捧げる私小説 その78 山田美枝子

重信房子さんを支える会

今日限

9

渾

粤

の

命

咲か

世

散

る

4

2

の

白

は

哀

七月八月の歌

爆

に

黒

煙

盚

0

777

1

7

ス

力

ス

 \mathcal{O}

紅

、咲き

合

重信 房子

紅

在

0

兴

<

古

里

を見

世

た

しく

عے

言

しく

友と

離

れ

久

朴

花

音

た

て

落ちる

静

か

な

B

初

め

て

記

す

君

^

に

瞳

凝

6

て

约

Ø

見

つ

80

先

に

線

香

在

ほ

お

ず

ਣਾ

0

色

鮮

か

に

藪

中忘

れ

た

詫

7K

状

思

ァ ゲ ハ 夏 Ø 瑰 追 UN か け て 麦藁 帽 子 の 幼 6 かぎ

0 木 の 下 に 敷 ਰੱ B 本 語 0 7 かぎ な 教

え Ø 批 夏 0 B の あ

梅 雨 U 80 り 我 を案 っ 手 1F 0 リ ス 見

せる

姉

0

面

独居より フターロー8月6日

総選挙、日本を変えるはじまりの一歩にしたいです

重信 房子

7月1日 立ち葵夏へ夏へと咲き登る

7月の花獄の幻

夏、東拘の夏暦は、7月1日から入浴回数が週2回 (月、木曜日) が、週3回(月、水、金曜日) に増え ることと、アイスクリームを7月1日から9月まで購 入して食べることができることくらいの変化です。す でに6月下旬から廊下に冷房が入りました。

私の方は、引き続いて癌に関しての検査です。6月 にも腫瘍マーカーが極端に上がってしまい潜血反応 も陽性で、小腸に問題ありそうと小腸の透視バリウム 検査を行いました。その結果、やはり怪しいところが あり、ちょうど小腸癌摘出の縫合部分近くにあたるた め、そのせいなのか、それともしこりなのか、透視バ リウムでも十分には確定し切れなかったとのことで した。この話は、6月17日の担当医の話でした。

それで、小腸鏡検査をやってみますか?とのこと。 私は「お願いします」と答えました。辛い検査であり、 機材も人材も東拘にはないので、外部から搬入借入準 備が必要で、すぐとはいかないとのことでした。私も できるだけ早い検査を希望していました。

2月の手術の後に、大阪の執刀医から、以下のよう に説明を受けました。小腸のリンパを廓清するところ で、1箇所が取りきれなかったが、癌の侵潤は、他の 個所に見られなかったので大丈夫でしょう。しかし、 リンパが腫れていたことと血管にはすでの癌細胞は あった。しかも大腸の腺癌と違って、小腸の方は腺癌 でも、たちの悪い「粘液酸性化癌」であったので、予 防補助治療として、抗癌剤を服用しましょう、と言わ れました。「小腸癌は稀で、まだ、データも基準もな いので、抗癌剤治療は大腸癌に準じていますが、抗癌 剤を飲んでも、効かないかもしれません」と、執刀医 は率直でした。

3月に腫瘍マーカーが少し下がっただけで、後は上 昇続きで、腫瘍マーカーは、通常人の CEA が5以下 のところ、40以上に上昇してしまったので、やはり 小腸に問題がありそうとのことでした。

カプセルを飲んで、消化器官を撮影する方法につい て聞きましたが、それは東拘ではやっていない。しか も私の場合は、カメラで見るだけでなく、組織採取が 必要なので、小腸鏡検査が最適のようです。今では、

5メートルから6メートルある細い小腸にカメラが 入っていけるのですか?と聞くと、上からと下から引 っ張りながら見れるところまで見るやり方で、やはり 真中あたりは見れないようです。でも、私の怪しいと いう縫合部分には十分たどり着けるとのことでした。

そんなわけで、6月下旬から絶食、下剤体勢に入り、 今日7月1日が小腸の内視鏡検査の日です。朝から、 採血、検尿をまず行いました。予定では、カメラは上 から胃、十二指腸を通って、小腸を引っ張りながら進 むとのことです。その後、大腸、下から小腸を引っ張 って、カメラを入れるために、大腸の洗浄も2リット ルの下剤飲みから始まりました。1リットルをなんと か飲んで、準備を13時までに終えました。また、検 査承諾書にも署名しました。

昼休み明けから検査室へ。どこにでもあるコンピュ ーター器材は、私には何の器材かわかりませんが、い つもと違ったものが並んでいます。技師のような外来 の医者が担当医、医務部長と共に入ってきました。担 当医も「ちょっと大変ですが、がんばってください」 と、声をかけてくれます。「皆さんこそ大変です。あ りがとうございます」と、ベッドの台からあいさつ。 外来医は「小腸検査は大体胃カメラの複雑で時間が長 いものと考えてください」「胃液吐きますので、汚れ ますよ」とのことで、大体イメージはわかりました。 「鎮痛剤の点滴も行いますよ」とのこと。

とにかく2時間近くかかって、小腸の検査を行いま した。モニターが見える位置にあったので、睡眠剤の うとうと、恒常的な胃液の吐き気の間に、モニターに 写る「たおやか」と言わんばかりの私の小腸の蠕動運 動を見ていました。縫合部分はポリープのような山と なっていて、そこらから4箇所組織を採取していまし た。モニターを見ていると、小腸に差し入れている管 の中から、さらに細い管を入れたり出したりして、腸 の動きに合わせて、「ハイソコ」「ハイ今」と声をかけ て操作すると、モニターがぱっと血に染まります。先 生も汗びっしょり。こちらも繰り返し、ぐわっと胃か らもどすような吐き気に汗びっしょり。実質は1時間 半くらいでしょうか。小腸の組織細胞を取ると、「ハ イ、終わります。もう良いでしょう。これで結構です」 とのこと。

「下からはやらないのですか?」と私。せっかく大 腸も洗浄したのに……。借りてきた器械だし、私も東 拘スタッフもやってほしい気分ですが、外来医者は 「もう終わりです」ときっぱり。小腸に問題があるの は判ったからもういいということか? 東拘側もそれ を受けて、終了となりました。

4時近く女区に戻ると、「6時ころまでと言ってたのに、早かったじゃない?!」と言われました。房に戻ると、ちょうど友人の入れてくれた白い胡蝶蘭が届いていました。ありがとう。すぐに夕食。胃がむかついて、夕食には手が出ませんでしたが、今日から解禁になったアイスクリームを食べました。胃が縮むようで、あまりおいしくなかったな……。でも、原因究明の小腸検査が終わってほっとしました。採血した腫瘍マーカーの検査共々、来週か再来週に結果が出るはずです。再手術なら、また大阪かな?空も土も見えるし……と、それまでにあれこれの宿題を早く終えようと思っています。

7月2日 半夏生花びらのない花言葉 「内に秘めたる情熱」という

今日から1週間の抗癌剤の休薬。身体に負担になる 化学療法のため、4週間飲んでは、1週間休薬のサイ クルになっています。今のところ副作用はありません。 雨の中、姉が面会に来てくれました。検査の結果を心 配して、モニター画面から判ったことはないかと気に して来てくれました。組織をとって検査中と伝え、話 をちょっとしたら、もう「時間です」と終わりです。往 復4時間以上かけて来て、面会10分では、本当に申 し訳ない。

房に戻って新聞を見ると、核兵器持込の密約についての記事を探して読みました。先月末、村田良平元外務次官が、密約があったことを証言しました。オバマの核廃絶演説以来、ブッシュ時代にはない、非核平和への弾みがついているようです。昔あれだけひどい「村八分」にされた毎日新聞の西山記者も、山崎豊子の小説「運命の人」に示されるように、復権しつつあります。権力の自己欺瞞、保身のための二重基準が明らかになり始めています。これこそ官僚支配の最たるものです。官僚支配のたがが緩んだのか、民主党政権をにらんで、公開のための動きなのか。この密約こそ国民は知る権利によって、権力の犯罪を問うべきです。首相のたらいまわしで、自民党は政権担当能力を失い、内部崩壊を見込んで、発言しないような人々がやっと発言し始めているのは、いいことだと思います。

旧友の手紙に、大学時代の先輩 I さんが 6月25日 に亡くなられたと記されていました。 え? あの元気だった先輩が?! と、びっくりしました。 65年、私が大学に入学した時の I さんは「吠える人」でした。入学式の前にお茶の水駿河台校舎に授業料を払い込みに行った時、学館の隣の大学院の前にマットレスを引いたちょっと異様に垢抜けない集団が、吠えたり、アジったりしていました。

「上杉君の復学を勝ち取ろう!」と、大きな立て看に旗、ビラを撒いたり、座り込んでいます。誘われて話を聞き、大学の管理費の値上げに反対した者の除籍か退学に対して復学を求めているのが分かりました。自分たちの学費の値上げではなく、次の人々のためだったと知って、そんな人も居るのか……と、感心しました。話を聞き、「座り込みませんか」と、Iさんらに誘われて参加したのが、私の学生運動への一歩でした。そして明大記念館地下の薄暗い自治会室にも、足を運ぶことになりました。

この人たちは、60年安保闘争の時に紫紺の旗を打ち立てて、学長以下何千の明大生が校歌を歌いながら国会デモを行った時、先頭で国会内に突入した人々でした。上杉さんという人は中核派で、IさんはブントML系の人々の近くに居たようでした。でも、みな「反日共の仲間」の時代でした。日共民青の集会や演説があると、どこからともなくIさんは駆けつけて、あの嗄れ声で、吠え出すのです。「日共批判はIでなくちゃ!」などと、当事仏文のONさんやみんなが拍手喝采。ざんばち髪に一張羅のジャケットで、眉をしかめて日共に吠えるIさんは、私たち下級生には「吠える人」として有名でした。

中東にいた時、誰かの送ってくれた資料の中に、I さんが市会議員となって、にっこり笑っている写真が あって、驚いてしまいました。あの吠える革命家 が?! と。Iさんは、OKさんら先輩たちと、私の 公判傍聴にも来てくれましたが、昔と変わらない生き 生きした姿。でも、吠えず、眉をしかめず、傍聴席で 手を振って屈託なく笑っていたIさん。ありがとうと 手を振り合いました。

改憲阻止にも、また平和運動や沖縄県人のための 種々の活動にも尽力してきた彼の早すぎる死に、呆然 としています。もうすぐ出る私の本を読んでほしい一 人だったのに……。合掌。

7月6日 ヤブカンゾウ見渡す限り咲き誇る 真中の道を逃げし内ゲバ 今日は朝から雨らしい。運動房に出ると、隙間から 見える庭の月見草の丈は伸びました。まだ、花を付け ていません。細い静かな雨を見ながら、ぼんやりと6 9年の7月6日を思い返しながら、運動房の中をくる くると歩きました。晴天のあの7月6日は、鬼百合の ようなヤブカンゾウが見渡す限り咲いていた夏。何で あんな闘い方しかできなかったのか?! 社会運動や 変革の可能性を摘み取ってしまったような、私たちの 闘いの稚拙さにあれこれと思い巡ってしまいました。 だから今どのように在るべきかが問われているなと 自覚しつつ。

房に戻ったら、係りの人が来て、都議選の不在者投票をしました。一字ずつゆっくり記しました。

午後、旧友の面会。急いで面会室に向かう中央棟の 隅に、七夕飾り! 何かはっとして嬉しくなりました。 そうか明日は七夕です。

また、房にもどると、少しして監査官面談で、会議室へ行きました。今日は1年に1度処遇に関して苦情などを提起する監査官面談の日です。滝本と名乗っていた監査官との面談は2時50分から3時すぎまででした。私は大きくは以下の点を申し立てました。

"まず、私の癌の治療に関して、東拘も大阪医療刑 も医療現場は良くやってくれてそれは大変感謝して います。それを前提として、以下の点の是正を求めま す。

第1に、癌の病気手術に際しての移監のあり方です。 突然夕食後に連行されて、「移動を明日するので、 ここで即荷物整理せよ」とのこと。「入院に必要なも のと、そうでないものに分けるように」指示されまし た。その際、手袋や綿入れの半天などなどは入院に必 要ないと、刑務官らと判断し、それらは置いていくも のとして、荷物の振り分けを行いました。終わった後 になって、「明日他の刑事施設への移監」と告げられま した。もし、その一言を荷物振り分けの前に、早く聞 いていたら手袋、綿入れなどは、持っていく荷物に加 えたでしょう。

結局、大阪に着いてから、もう東拘の荷物は送って もらったりできないとのことだったので、家族に新し く購入してもらわざるを得ませんでした。届くまでの 寒さは大変だったし、お金も不要に出費してしまいま した。病人への配慮を持った対処を行うべきです"と 述べました。

"第2は、高等検察庁への苦情・批判です。(滝本 監査官は、検察庁への申し立ては、別の手続きがあり ますが、聞いておきます、と話を聞いていました。) これは手術後の早すぎる高検の移監命令の問題です。多分、当初から1月27日出発、2月24日戻りの予定を立てていたのでしょう。しかし、2月3日に手術をしたところで、大腸のみならず、小腸癌が見つかりました。しかも抗癌剤治療となったため、大阪医療刑では、ちょうど庭にあった桜の花を見てから帰ることになるだろうと言われていて、私もそのつもりでした。ところが抗癌剤を飲み始めて4日目、まだ体調不調のまま移監命令を強行しました。

その結果、ずっと、腫瘍マーカーが上がり、今では 手術前の数値以上になってしまいました。そして、東 拘の医務スタッフが大変苦労して、器材、人材も搬入 して7月1日に再検査を強いられました。これは人災 で、高検の非人道的官僚的命令のもたらしたもの。責 任は、慎重を欠いた高等検察庁にあります。東拘にも、 大阪医療刑にも、その責任はないでしょう。高検のあ り方を問いたい"と述べました。

滝本検査官は高等検察庁宛の苦情などは他の方法であり、こうした場ではふさわしいとは言えない。一応聞き伝えますが、監査官としての役割は、この施設の苦情を聞く立場にあるものと述べていました。一応お伝えしますので、しかるべく伝達くださいと伝えました。

"第3に、病人受け入れの東拘のシステムの配慮に 欠ける点。病人が寝て、戻れる条件を準備すべきです。 吐き続けて戻ったが、手錠座席状態で、体力を悪化さ せてしまいました。加えて、一時入院手続きで出て行 ったのに、新入所者扱いで東拘に戻ったのです。拘置 者ナンバーは変えずに、4回も同じ人定質問を繰り返 し、時間もかかりました。こういう病人への配慮を欠 いた扱い、官僚的管理優先のシステムを改めてほし い"と述べました。

他には、"官本の医療関係の本は、六法のように、 2年に一度くらいでいいから、常に更新し、新しくし てほしい。医療はずいぶん変化するので。また、一種 類の「家庭医学館」しかないが、違った種類なども、官 本図書として保持してほしい。"

以上の点を伝えました。他にも運動房のことなどあるのですが、とりやめました。毎年、「希望の開陳に過ぎない」と、すげなく却下されつづけているし、今年は省きました。この9年、ひとつも要請が受け入れられたことはありませんが、こちらも懲りずに訴えつづけます。毎年、新しい改善要求(当局は苦情と呼ぶ)は、あるものです。

7月7日 七夕の天の川満つる晴天の

流星の降る故里はベカー

獄に居ても、七夕の晴天は嬉しい。どこかで人々が めぐり合える日なのだから。

今日は珍しい友人や筆不精の旧友やメイからもお 便りを受け取って、夜は七夕気分です。昨日設置した ばかりの七夕飾りは、ちょうど面会を終えた3時半に 見てみると、もう撤去されてしまいました。

7月8日 上昇の腫瘍マーカー下降へと 転じたと知る日房にひまわり

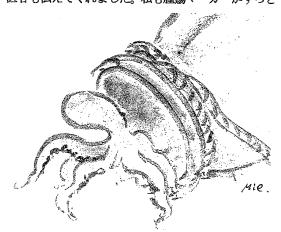
運動房に出ると、風が強い。空は曇り空。

「核なき世界への協調」をめざしてと、新聞は書いていますが、イタリア、ラクイラムのサミット。世界経済も、不安定・不確実なまま。パレスチナ問題も、イスラエルがネタニヤフ政権になって、和平交渉の当事者能力のない者たちに変わり、ガザ封鎖も解除されず、暴力支配が繰り返されていて、明るい先が見えません。レバノンは、まだ6月総選挙を経て、組閣が成立していないようです。

午前中は、風呂、運動、手紙書きと、あっという間 に過ぎて、午後は歯科。

終わって房に戻って、面会。弁護士と面会中の午後に、診察の呼び出しが来ました。あ、ちょうど小腸の検査結果と腫瘍マーカーの検査結果が出るはずですと言うと、弁護士は結果を確認してから帰るから待っていてくれるとのこと。慌てて、診察室に行きました。

担当医は、まず、小腸内視鏡の小腸壁の縫合の丸いポリープのような写真など見せてくれて、「このあたり、4箇所から組織をとって、検査しましたが、癌は見つかりませんでした」とのこと。ほっとした様子で医者も伝えてくれました。私も腫瘍マーカーがずっと



上昇中だったので、再発や取り残しかと覚悟していた のですが、意外?!と言う気分で、ほっとしました。 大阪の医師は良い仕事をきっちりやっていたようで す。

それから、7月1日採血の腫瘍マーカーがはじめて 上昇から下降に転じたと知らされました。CEAは、 前回42.5が41に少し下がっています。また、C A19-9は、前回54が47です。

この結果、大腸、小腸とも癌は今のところ取り除かれていると判断して良いと思うので、当面は現在の抗癌剤治療(大阪で指示された6クールを9月中旬まで続ける)で進めるということになりました。

医者に、実は私は友人にすすめられて尿療法をやり始めたことを知らせました。それも効いたかもしれませんね、と医者たちは驚きつつ、笑って聞いてくれました。とにかく、これまでは上昇していた腫瘍マーカーが下がり始めたので、尿療法も効果があったかもしれないし、抗癌剤が効き始めたのかもしれないし、良いことは続けていこうということで、次の8月の採血結果をまた確認しようということになりました。

すぐ、面会室に戻って、弁護士に小腸カメラの結果 癌細胞なしと腫瘍マーカーがはじめて下がり始めた ことを告げると、良かった! と、喜んでくれました。 弁護士も、今度は、大阪ではなくて、府中になるのか な……などと考えながら、実は待っていたと、喜んで 話してくれました。これからは、もう一歩一歩よくな るでしょう。ストレスの強い情報は避けて、楽しいこ とに力を注ぐように、と何人もの友人からもアドバイ ス。そのように、リラックスします。

房に戻ると、ひまわりが鮮やか。明日から第5クールの抗癌剤治療が始まります。

7月13日 権力の私物化されし我が祖国 核密約もその書の廃棄も

月見草がコンクリートで固められたその隙間を縫って、ビルの真下にもあちこちに黄色の花をつけています。2004年から、河原の工事の砂利に運ばれて咲き始め、今では広い範囲すべてが月見草に駆逐されてしまった観があります。中央棟の屋根の低い部分には、いつものところに姫女苑がすっくと3本伸びています。これは、鳩が糞と共に連れて来た贈り物です。ベランダの卯の花が一斉に白い花を付けています。梅雨の夏らしい風が暖かい。

友人が癌の手術の後からこそ良く治療するように と送ってくれた本に、食事療法の重要性が書かれてい ました。私の条件でできることはほとんどありませんが、水を飲むこと、野菜果物ジュースを毎日1リットル以上飲むことをすすめていました。それで、これまで飲んだことのない野菜ジュース1個200ミリリットル、102円を購入して飲むことにしました。1リットルなら、5本ですが、ちょっと高い。3本飲むことにしました。その購入したチケットが届いて、少し前から飲み始めています。これも良い効果、腫瘍マーカーの下降に貢献しているでしょう。

新聞では、核持込密約があったこと、それを01年の情報公開法前に、その文書も密かに処分してしまったという証言が出てきたとの記事。国家の私物化であり、日本に対する、歴史に対する犯罪行為です。こうしたことが軽々に行われてきた日本の自民党官僚支配。今では、事実として突きつけられているにもかかわらず、とぼけるしかない自民党政府と外務省官僚とは犯罪者ではないのか?と、怒りが込み上げます。公園のトイレの落書きや自衛隊派兵反対のビラを郵便受けに入れることを犯罪として裁き、こんな巨悪に鈍感なこの国は、何か麻痺していて恐ろしいと思います。

そして、やはり、都議選は民主党の圧勝。自公過半数割れとなりました。ひどすぎる権力への怒りでしょう。ブッシュの時代の希望のない閉塞感からオバマのチェンジの流れに、時代の変化が人々に発言をする意欲を育てているようです。小さなチェンジも歓迎!です。変える意志があれば、必ず変わるのを世界の中で、何度も現認し、実感したのですから。

7月21日 雨となる国会解散日本の

変化の一歩となるか八月

衆議院が21日に解散。衆議院総選挙は8月18日公示、8月30日投票日と決まったようです。自民党内の党首、首相すげ替えすら繰り返しで、国民の不評を買って最早再生力は生み出されていません。民主党が政権をとるでしょう。でも、その次の変化が必要です。平和への軸足に力が入り、日本が憲法にある9条に基づいたまともな国づくりをするように、国民の側から求める変化の一歩に過ぎないでしょう。民主党には、呆れた改憲勢力が多いし、期待は大きくはありません。それでも、公正や公開に敏感で、でたらめな官僚支配に対して、自民党よりましでしょう。幻想のレトリックであるとしても、オバマのチェンジの時代の非核軍縮の流れに沿って、9条を国際路線とする日本再生の一歩としたいものです。そのために、総選挙を日

本を変えるはじまりの一歩にしたいものです。

ちょうど、私の本の出版に尽力してくれたOK 先輩や、河出の方が面会に来てくれました。そして『日本赤軍私史―パレスチナと共に』の見本を持って見せてくれました。あれ?! 表紙……派手ですね……。著者の第一声。でも嬉しくて感謝。これはPFLPの「女性の日」のポスターで、マザーランドを象徴したデザインから取ったものです。ちょうど癌の発見と手術と重なり、本の出版計画を大幅に遅らしてしまいました。それにストレスにならないようにと、手術後は校正の部分の問い合わせに答えたり、校正も全ゲラを通しで見ずに、(見せると直したくなるからと先輩の配慮もあって)済ませました。ミスがあれば、私の責任です。本当にありがとうございますと、お礼を伝えて、本を差し入れてもらいました。今週届くかな……。

7月29日 月見草見渡す限り点々と 黄の頭たれ鉄格子の向こう

月見草が真っ盛り。晴れた青い空の下に、朝、半開きの花をつけて、鮮やかな黄色、点々と続いています。 プランターが二つ届きました。黄色のマリーゴールドがいくつか咲きはじめているプランターです。朝顔が届くと言っていたのですが、蔓が伸びてしまったとか、届きませんでした。小さなプランターの花は、それでも嬉しい変化です。

Pさんがフランス人の友人と面会。海外4週間のバケーションとのこと。そこで、私の本も読むよなどと言っていました。欧州の人々は、1ヵ月はバケーションをきっちり取りますが、私の友人たちは、なかなか財政的にもそんな優雅なことはできないようです。

私の手元にも『日本赤軍私史―パレスチナと共に』 届きました。私の体調が手術後も腫瘍マーカーが上がったこともあって、校正はゲラ全体を見ることをしませんでした。OKさんも病気中と気を使ってくれたようです。OKさんがいなかったら、本はできませんでした。通しで校正しなかった結果、いくつか校正ミスが出てしまいました。以下2点だけここに誤植を正します。

377頁11行目 82年2月→86年2月 452頁16行目 2003年3月

→2000年3月

この本から、私たちの活動の歴史の流れを政治的に 理解してもらえたら嬉しいです。 獄外では、私より早 く手にした友人から、読んでますと、励ましのエール が届き、感謝です。派手な表紙も良いと言ってくれま

した。

昨日は、衆議院解散中のしかも裁判員裁判の間近な時に、法務省は3人の死刑を執行しました。世界は死刑廃止、停止の流れにあるのに。裁判員たちを検察の枠の「正義」に押しとどめるデモンストレーションのごとくに見えます。死刑廃止を求める議連や市民団体が抗議の会見を行ったとの記事。民主党政権になれば、友党となる亀井静香や、社民党の意見を受けて、どのように変化するかわからないと、先回りした検察官僚の差配が見えるようです。法務省は核密約とその文書廃棄の犯罪こそ問うべしです。

8月1日 入道雲に陰りか陽を浴びまた陰り 目眩く夏に抱かれし獄

8月に入ったのに、まだ梅雨のような天気。今日は 土曜日なので、運動もないし、独房に座りっぱなしで すが、晴天のために少し入道雲が見えます。この雲が もくもくと動き、小さかった私たちは蝉やカブト虫や 水遊びで、毎日忙しい夏休みでした。今日も雲が動く たびに、太陽が房をぱっと陽で明るくしたり、逆に遮 られて、ぐんと暗くなったりと、入道雲が東京拘置所 を囲んで、笑っているようです。

張承志という中国の作家が中国で日本紹介の本を 出版し、その中の一章に日本赤軍について触れている そうです。メイの写真を使ったことへの諒解を求めて、 その中国語の本とその人が前に書いた他の著書『紅衛 兵の時代』(岩波新書)がメイに送られてきたようで す。四方田先生からもその中国語の本については聞い ていました。

その『紅衛兵の時代』という本を読みました。この 張承志さんはウイグル族の出身で、精華大学付属高校 に入学し学問に励みながら、大学の改革をめざし、最 初に「紅衛兵」という名を名づけた人物として知られ ている人らしいです。今でも抑圧された人の側に立と うとし毛沢東の深い考えに尊敬の念を持っている様 子が『紅衛兵の時代』に出ています。

あの時代、正義を求めてがむしゃらに私たちも闘いました。同じように国境の向こう側でも60年代同世代の人々が正義を欲して考えながら、行動していく様が記されていて、胸が熱くなりました。当時、ブントや私たちは文化大革命は革命の失敗の補助革命だとか、評価も余りしませんでした。また、画一的な中国式の社会主義はごめんだと「自由主義」の私は考えていたので、深く考えていませんでした。今になると、熱性的に情熱を傾けて闘った時代の共威として、読む

ことができます。

友人たちからの暑中見舞いありがとうございます。

8月4日 房検査待ちつつ開いた新聞に

「裁判員の法廷時代へ」

今日は朝金網の青天井の運動房に行きますと言っていたけれど、雨が降り出したとのことで中止。暗い 運動房の方に行くと、梅雨じめりのような天候です。

午後には、月に一度の房内検査。検査の時は、空いている他の房で待たされます。新聞を持って移動しました。それまでばたばたとして、読めていなかった今日の新聞を開けると、裁判員裁判スタートの記事が大きく、一面も社会面も占めています。反対を訴える団体も地裁前でアピールしたとのことです。

私は、今の日本の司法の体制、検察が「正義」を独占し、裁判官がおもねている現状に裁判員を組み込むことは反対です。検察寄りの今の風潮に国民を動員してしまうからです。反対しつつ、一方で始まった以上権力を監視する下からの声を育ててほしいと思います。

私も公判で使っていた104号法廷で、初の裁判員参加の公判が行われています。2382人が傍聴を望み、58枚の傍聴券とか。98席あるらしいです。私の時には、弁護人からマスコミ席を減らして、一般席を広げるように交渉したので、80近くの一般席があったらしい。

人々の関心はどうか判らないが、マスコミの関心が 高い分、記事を通して人々の関心も高まっていくでしょう。しかし、余りに拙速な公判スケジュール。被告 人の権利が著しく侵害されるし、ますます検察の「正 義」の枠組みの中に、落とし込められていく形でしか ないように思います。

裁判員制度によって、一般市民を裁判に長い期間拘束できないからという論法で、これまでじっくりと事実関係の主張や審議に何年もかけてきた第一審が、形式だけのものになってしまいそうで危険です。市民裁判員たちの真剣な良心が権力に収斂されてしまいそうです。

イスラエルのネタニヤフ内閣は、あれこれと馬脚を 現しているようです。

イスラエル警察は2日「イスラエル我が家」党首で あるリーベルマン外相を、資金洗浄や収賄などの罪で、 起訴するように検察に勧告したようです。ロシアマフィアと結びついたリーベルマンは、ソ連崩壊・資本主 義化のマフィア経済の恩恵を受けた人物です。ゴルバチョフ政権がイスラエルと国交回復し、100万人のユダヤ移民開放政策を取った中で、のし上がって来た右派です。ずっとパレスチナに暮らしていた人々を押しのけて、パレスチナ人の排斥を公然と訴えてきました。

イスラエルは建国時から多民族国家なのに、「ユダヤ人国家」と認めよというネタニヤフの主張も占領と排斥拡張主義政権で、和平の可能性を閉ざしたままです。こうした右派政権はイスラエルの市民社会内部の排外主義を煽り立てながら、国際社会と矛盾せざるを得ないのは明白です。

今こそ、米国はそのダブルスタンダードが問われています。ユダヤ人内部でもシオニストの内部でもこうした政権によってイスラエルは矛盾を抱えつづけるでしょう。冷戦型の国家イスラエルは存亡を問われながら、凋落していかざるを得ないでしょう。それをパレスチナの犠牲の上で、あがいているように思えます。パレスチナでは、ファタハが8月4日から20年ぶりにファタハの総会を開くとのこと。この開催をめぐって、ずっと新旧世代ばかりか、論争が続いています。ことに70年代から一貫してPLOの政治局長を務

ことに70年代から一貫して PLO の政治局長を務め、オスロ合意にも反対してきたファルーク・カドゥミが7月に爆弾発言をし、それをめぐってアッバスらは「ファタハの統一を破壊する嘘である」と、否定に躍起になっています。

カドゥミは、アッバスとモハマッド・ダハランがアラファトの毒殺に関わっていると発言しました。2004年3月上旬のパレスチナ・イスラエル・アメリカの会議で謀議があったこと。そこで、アラファトとハマスのアブデル・アジズ・アルランティシ暗殺に与していた証拠があると、カドゥミが述べたそうです。彼はファタハの大会を前にして、パレスチナ解放運動に入り込んだイスラエルの陰謀の現実を示すべく公表すると述べています。

西岸自治区では、7月15日、こうしたニュースを流したアル・ジャジーラの事務所を閉鎖するよう、自治政府は要求したとのことです。理由は、ファルーク・カドゥミのインタヴューを報道し、PLOと自治政府を傷つけたということらしい。

そうした暴露の他にも、ファタハの若手からも旧世 代の汚職や利権、人事への不満や批判が続いて、ファ タハの民主化透明性が要求されていました。それらが どう決着つけられるのでしょう。ハマスとの対立は続 き、和解内閣選挙の方法も決まっていません。



アッバスらは米国や西欧に頼って、権力維持を計ろうと、若い世代を自分たちの権力の一部に取り込むことでファタハ内の不満をかわし、対ハマス、対イスラエルへと、はけ口をまとめようとしてきました。今回も、結局、財力を握ったアッバスらが、そのようにして居残るでしょう。

レバノンでは、6月の総選挙の後、大統領から首相として組閣するように指名されたサード・ハリリは、今もまだ内閣を作れていません。レバノン選挙で、議会多数派は、与党のハリリの未来運動を中心とした3月14日連合(反シリア決起を記念した名前)が71議席、ヒズブッラーを中心とした野党連合は57議席という結果でした。それでも議会多数派は、国民少数派で、45.3%の得票率です。選挙制度のせいですが、野党は54.7%の得票率を得ていて、これまで野党側が持っていた内閣の3分の1のポストを渡すよう要求するだろうと、前号の「オリーブの樹」でも、記しました。3分の1は、閣議決定に拒否権を持つことができるポスト数です。

この7月から8月にかけて、3月14日連合のドルーズの進歩社会主義者党のジュンプラットは、「3月14日連合の必要性は終わった。わが道を行くべし」という発言をし始めました。他の3月14日連合の未来運動や、マロン派キリスト教徒のファランジ党や、レバニーズ・フォーシズなどは、その発言に慌て、また怒っています。何のための多数派連合だったのか?と。71議席から、ドルーズの分の11議席が野党側にでも行ってしまったら、与党は60議席隣、野党は68議席になってしまうからです。野党の閣僚の3分の1争いの拒否権の話も意味がないと。

ジュンブラットはまだふらついていて、スレイマン

大統領のように自分は中立に立って、野党ブロックに は入らないと言い訳を始めました。8月6日までには 必ず組閣を発表すると言ってたハリリは、8月2日の ジュンブラット発言から新しい問題に直面していま す。すべての人が今か今かと組閣の発表を待っている 時に、ハリリ首相候補は南フランスへ家族とバケーションに行くと言い出してしまいました。まだ、組閣は 時間がかかりそうです。

ジュンブラットは、ハリリらスンニー派や内戦時の キリスト教徒右派を中心とする3月14日連合とは、 反シリアで共同してきました。しかし、その後、シリ アとレバノン間の国家外交関係の成立で落ち着いて きたことや、自分の陣地と繋がるシーア派との和解な ど、変化がありました。

反イスラエルの抵抗運動のヒズブッラーの武装解除がアメリカや右派の要求として、今後焦点化していく前に、反イスラエル抵抗運動の側に自らをもう一度位置付けようとする動きでしょう。彼の動向は与党がせっかく握った多数議席を脅かしています。こうした動きの根底には、ヒズブッラーが即時的に自派の利益を求めず、抵抗運動、軍、国民が一体となって、国を再建するようにと、原則的な活動の中で、ジュンブラット派と統一や共同を築いてきたことがあります。

日本では、8月4日には、首相の私的諮問機関(安全保障と防衛力に関する懇談会)が報告書をまとめ、武器三原則の緩和や集団自衛権を見直すように提言しているとのことです。小泉政権のイラク派兵以降、空自、陸自、海自まで、派兵が既成事実化されて、憲法の形骸化が進み、9条を意味のないものにしています。8月の総選挙で、民主党政権になっても、前原元党首のような勢力も大きな力を示しています。それでも、国民の側からの9条実現の声と実体を作り上げながら、変化を育てたいものです。安保防衛懇提言こそ時代遅れのものに過ぎないと。

8月5日 暑中見舞い友の便りに夏がある 北海道から四国九州

今日は青天井の運動房へ。空が青いと今ごろのベイルートがやっぱり思い出されます。

午後診察室に呼ばれました。7月29日に採血した 腫瘍マーカーの検査の結果を知らせてくれました。7 月に続いて、またCEAが下がったとのことです。(前 回の41から38.7)この調子で、治療を続けることを確認しました。大阪で指示された抗癌剤の化学療 法治療の第1期サイクルが、9月中旬で終了します。この時までにCEAがまだ高い数値で降りてないなら、引き続いて抗癌剤治療を続けた方が良いと言われました。そんなわけで、今のところ順調な患者になっています。腫瘍マーカーが少しずつでも下降に転じたことは、とてもよかったと思っています。本人は自覚症状ない分、治った気分でいます。でも、まだ、潜血反応、腫瘍マーカー、癌の因子がうろうろしているようです。

今日、夕方、友人から、脳腫瘍の手術を来週行うと いう便りが突然届いて、びっくりしています。どうか 無事でよい結果を。

8月6日 重き雲見つめて祈る朝の獄 核廃絶の時を誓いぬ

「原爆忌」曇りの重い空の日。

原爆症訴訟全員救済へと、被爆から64年目の政府のやっとの決断。被団協と麻生首相は「集団訴訟の締結に関する確認書」に署名したとのことです。また、訴訟していない被爆者の数も多い。被爆者は約24万人居て、原爆症認定を申請し、審査を待つ被爆者は、7,600人いるとのことで、その人々は今回の救済には含まれていないということです。

オバマ演説を機に反核非核が、日本のみならず世界に盛り上がり、また総選挙を控えた「ヒロシマ」「ナガサキ」の8月、自民党政権も確認書に署名、決断したのはいいことです。

広島は平和宣言を発し、核兵器を使った唯一の国と して行動する道義的責任があると明言した、オバマ演 説を支持し、共に核廃絶を願う多数派をオバマジョリ ティーとして結集し、実現するよう呼びかけたようで す。

マハティール元首相、イスラエル駐日大使も、式典に参加したとのことです。イスラエル大使は、ホロコーストにヒロシマ、ナガサキを重ねて、原爆記念館を世界にホロコースト記念館同様に建設しようとアイディアを発言していましたが、それは良いことです。何よりも原爆を落とした米国の大統領オバマがヒロシマ、ナガサキに来て、謝罪して、核廃絶を誓い、イスラエルは中東での唯一の核兵器保有を放棄して、中東非核化を実行することが先でしょう。

政治に利用されない人間の良心と権利の姿として、 平和宣言を日本の国際路線としたいものです。そのこ とを考えながら、8月30日の総選挙に臨みたいもの です。

- 重信さんとの交流コーナー

分離壁 虚構と現実

辻 邦

■壁を挟んで……

最近、インターネット上の動画サイトで、とんでもない映像を目にした。それはイスラエルのTVで流れている携帯電話のコマーシャルをアップしたものだった。

CMの舞台は、イスラエルの占領地とおぼしき場所 だ。分離壁を思わせる高い壁の横の道路を、武装した 兵士たちを乗せたジープが通りかかる。その時突然、 壁の向こう側から何かが飛んできて、ジープのボンネ ットに落下する。兵士たちの間に緊張が走る。「一体何 が飛んできたのか。」やがて兵士たちは、飛んできた物 体がサッカーボールであることに気付く。一人の兵士 が、そのボールを壁の向こう側に蹴り返す。すると、 またボールが壁を越えて再び飛んでくる。兵士たちと 壁の向こう側の相手との間で、ボールの蹴り合いが始 まる。やがて多くの兵士がそこに集まり、歓声が上が り、女性兵士が笑顔を振り撒く。緊張感のほぐれた兵 士たちと姿の見えない相手との間で、あたかもサッカ 一の試合が行われているかのような光景が続き、バッ クには爽やかなヴォーカルが流れる――この携帯電話 のCMの内容はだいたいこのような物だった。

一体何なのだ、このふざけたCMは……!?

■現実の矮小化

このCMの無神経さ・ひどさは、まず分離壁というものを、何の疑問もなくごく当たり前の前提であり現実である、としていることだ。アパルトへイト・ウォールと呼ばれる分離壁は、明白に国際法とジュネーブ条約に違反している。だからこそ国連総会で、分離壁建設を強行するイスラエル政府を非難する決議が採択されているし、2004年7月には国際司法裁判所によって、分離壁は国際法違反であるとの判決も下されているのだ。だが、このCMの製作者の頭の中には、そんな国際世論などまったく存在していないかのようだ。

さらに、壁をはさんで占領する側の立場に立つイス ラエル軍兵士と、姿の見えない相手(もちろんそれは パレスチナ人であるに違いないのだが)との間で、サ ッカーボールの蹴り合いが行なわれ、お互いに理解を 深め合う? というストーリーのいかにも陳腐である ことだ。どうしたらこのようなふざけた話が出来るの か、製作者の思考回路を覗いてみたいものだ。

そもそも、パレスチナ人を封じ込め、世界から分か ち、移動の自由を剥奪し、その存在そのものを地球上 から消滅させよういう意図の下に築かれたとしか思わ れない分離壁を間に挟んで、占領者であるイスラエル の兵士と、それに抵抗を続けるパレスチナの人々が、 たかが (と言うとファンには怒られそうだが) サッカ 一の試合などで理解し合えるなどという発想自体、欺 **瞞的で偽善的だ。しかも、「理解し合う」ために分離壁** がなければならない。壁が存在しなければ、イスラエ ル軍の兵士が「目に見えない相手」とボールの蹴り合 いを行なうことができないからだ。さらに、このCM の中には、一方の当事者(被害者)であるパレスチナ人 が登場していない。おそらく、製作者にとっては、パ レスチナ人は目に見えない存在であり、存在していな いに等しいのだろう。これを傲慢と言わずして、一体 何と呼べばいいのだろうか!?

イスラエルへの抵抗を続ける占領地内のピリンという村で、このCMに対する痛烈な映像が撮影されている。それは、実際にパレスチナ側からイスラエル側にサッカーボールを蹴り入れたらどうなるのか、という内容のもので、これも動画サイトにアップされている。

パレスチナ側からイスラエル軍が設置した鉄条網のフェンスの向こう側に、CMと同様にサッカーボールが蹴り込まれた。さて、そのボールはイスラエル兵の手で(いや足で)パレスチナ人の方に蹴り返されてきたであろうか? いや、そんな馬鹿げた行為が起きるはずがない。当然ながらイスラエル側から打ち込まれてきたのは、ボールではなく催凍弾であった。パレスチナ人たちが逃げ惑う中、かのCMに使用されているのと同じ音楽が流れ、周囲には催凍弾の白い煙が立ち込める……

これが現実の姿だ。これこそが、パレスチナの真の姿なのだ。

アラブ物語(3) -

リッダ闘争への道(1)

1、バーシム奥平

奥平剛士
これが俺の名だ
まだ何もしていない
何もせずに生きるために
多くの代価を支払った
思想的な健全さのために
別な健全さを浪費しつつあるのだ
時間との競争にきわどい差をつけつつ
生にしがみついている
天よ、我に仕事を与えよ

バーシム奥平が戦死した後、日本に残された何冊かのノートの一番後ろの頁にこの詩が残されていたという。残された彼のノートの大半は大学入学直後から東九条のセツルメント運動にかかわってきた、そのころのノートだという。そこには、葛藤や逡巡、権力と対決する不安など率直な姿が記されていたという。

ベイルートに着いてしばらくして、サンセットの落ちる地中海の穏やかな海を見下ろしながら、バーシム奥平が当時を語ったことがあった。東九条や日共民青のこと。どう活動しつくしても、違和感が残るのだと言っていた。「これは同情だ。同情ではなく、各々が対等に主体となって闘う道はないのか」と。

セツルメント運動の縁から民青にも誘われて入ろうとしたこともあったという。そして、またある時には、その立場から、民青の防衛隊の一員として、京大でのゲバルトにも加わったことがあったらしい。「自分が殴ったのは、赤軍派に行ったTではないかな」と笑っていた。しかし、結局民青には行かなかった。違和感が消えなかったという。

その違和感から、民青の加盟届けを書くところまでいったが、結局取りやめたという。自分の組織名に、ある爆弾事件の人物の名前を主張してみたという。(60年代、その名で爆弾が仕掛けられる事件が何件かあった。)彼は冗談ではなく真面目だったのだ。しかし、民青は、彼を不真面目と言い、彼の提案した組織名を変更するように指導したらしい。民青はやっぱ

重信 房子

りその程度か、とそのままになって、やめたと言っていた。そして、トロツキーを猛烈に読んだ。(当事、日共は、トロツキストと新左翼を批判していた。)そして、トロツキーこそ革命家だと感じたという。

その後、全共闘の運動に参加し、パルチザン5人組の闘い方に興味を持った。彼が全共闘運動にかかわったのも、そんなに長い時間ではなかったらしい。全共闘運動は、工学部の仲間や、京大時計台に立てこもった弟の純三や、その友人たちが彼を慕い、仲間として残っていたが、その闘いの退潮の中で、闘いの場を見つけられずにいた。

そして、セツルメント時代からの親しい仲間と土方 仕事をやっていたという。この土方の親方たち、彼ら の偽りのない剥き出しの精神に共感しながら己を問 うていた時に、パレスチナへの道が開けたということ らしかった。

バーシム奥平の弟の純三は、ある日、二人が下宿していた家に戻ると、兄貴が「今日は良い話が届いた。 パレスチナへ行く」と、目を輝かして語ったと言っていた。そして、その日から、彼は即座に闘いの道を定めたようだと、後に話していた。

"天よ、我に仕事を与えよ"確かにこの詩には当時の彼の姿がある。自分の「特権」を否定し、社会に尽くしたい、自己否定しても自己否定しても何者かであろうとする自己がいる。何かを為すべきなのだ。そんな自分への叱咤がある。この詩は、パレスチナ解放闘争のボランティア参加に即座に同意した、澄んだ瞳の彼に重なっている。そして、また、連合赤軍事件の後「退路を断った闘いに行くつもりだ」と告げた時の穏やかな彼の瞳に重なっている。彼が戦死したずいぶん後に「天よ、我に仕事を与えよ」(奥平剛士遺稿編集委員会1978年)という本が刊行されて、この詩を知った

そうか、彼はいつもそのように生きて来たのか。彼 の中には奥平剛士を見つめるもう一人の彼がいて、安 逸さや逡巡や甘えを許さないのだ。

当時のパレスチナ解放運動は、希望を渇望していた。 70年ヨルダン内戦によって闘いの道が抑圧され、停 戦協定を強いられ、多くのパレスチナの仲間がヨルダ ン政府軍に殺された。イスラエルでなく、ヨルダン・ アラブの政府がイスラエルの肩代わりをして、我々を 殺すなんて!

そして、71年ヨルダン内戦の停戦協定の妥協の中でかち取ったジェラシのゲリラ駐屯地は、7月、2万5千の政府軍の包囲に壊滅させられて、多くのコマンドが再び虐殺された。その上、ヨルダンは72年3月取知らずにも、パレスチナ人の主権を無視して、パレスチナ人の代表権を簒奪する「ヨルダン連合王国構想」を発表した。PLOが唯一合法的なパレスチナ人の正当な代表であることを認めようとしないヨルダン。武装闘争によってパレスチナを解放する闘いにこそ正当なパレスチナ人民の意志がある。PFLPは被占領地パレスチナでの闘い、イスラエルに対する闘いによって、それを示したいと考えていた。

PFLPには、大胆にイスラエルに挑む作戦司令部があった。アブ・ハニ、ライラ・ハリッドその他の名の知れた者たちは、当時の武装闘争を闘うパレスチナ戦士たちの憧れや模範であった。この作戦司令部は、「PFLPアウトサイドワーク局」と呼ばれていた。この部局は、軍事局や被占領地局から独立して、イスラエルの権益に対して打撃を与えるためにある。後のリッダ闘争もこの部局の仕事であった。パレスチナの闘いには、パレスチナ人のみならず、アラブ、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、そして、アジアから、連帯を求めて非軍事的、軍事的闘いに参加する多くの若者たちがいた。

レバノン南部戦場で、訓練を終え、戦場に駐屯していた若者たちの中から、バーシム奥平は作戦司令部に選抜されて、特別ゲリラ戦の道へと自らを飛躍させた。人々のために役に立ちたい、役に立つようなことをする、それはすべてのボランティアの希望でもあった。バーシムの決断は国際連帯の信頼を一身に背負って進んだ。

私は公判の中で、バーシム奥平についてこう述べている。

「奥平さんは知識を決してひけらかさないけれども、何ごとにも精通していたし、努力家でした。はじめて会った時から、私心なく自らを律する人だと思いました。現実を解決するためにと、プラグマチックに対応しがちな私と違っています。自ら進んで、もっと困難なことに挑戦する奥平さんの精神に尊敬もし、時には反対もしました。無私の彼のこうした精神は、京都九条のセツルメント運動で、発揮されていたようで

す。奥平さんは、最も抑圧された人々が最も望む方法 で、人生を全うしたいといつも思っていました。」

バーシム奥平がいなかったら、PFLPのリッダ闘争が実現され得たかどうか判らない。バーシム奥平は、自分に挑戦を課す人だったし、そのように彼は生きてきた。彼のリーダーシップがアブ・ハニ(アウトサイドワークの責任者)と共に、パレスチナ解放運動の闘いの当時の戦術を規定していた大きな力だったと思う。

彼が発つ最後の夜、また会う時にと彼が私に托した 小さな彼の荷物の中に3冊の本があった。独語辞典と 唐詩選、それにボロボロになったランボー詩集の文庫 本。私は詩を書かなくなったけど、彼もかつて詩を書 いていた。彼が発つ最後の日に少し詩について語り合った。

残されたランボーの「地獄の季節」にいくつもの書き込みや線が引かれていた。「俺は自分の理性の囚徒ではない」という一行に、黒々と引かれた太い線だ。

2、1971年--アラブ---日本

1971年早春に、ベイルートに着いて活動し始めた私たちは、日本サイドの赤軍派森指導部とうまく共同できずにいた。場所的距離は思想的距離となってしまった。

私たちが日本を出発する少し前から、赤軍派は大衆基盤の枯渇と財政難を補う方法として、M作戦を採用した。これまでの日本の運動の中でもこうした倫理意識の欠けた闘い方は、戦後はなかったと思う。「革命戦争の必要」として、森指導部と軍が、どのようにM作戦を決定したのか、非軍事部門には知らされなかった。しかし軍に居る友人を通して、「度胸だめしの引ったくりも話題にのぼっている。こんなことをして良いのか?」と相談を受けて、はじめて知る有様だった。でも、私もその赤軍派の一員なのであった。(そして、また、後に違った形で、自分たちだって同じように誤ったM作戦を行ったのである。「大義」の名において。)よど号事件以降、権力の凶暴さの中での対抗措置として、これを関いませた。この対抗者によって知れ、といまと知り

よど芳事件以降、権力の囚暴さの中での対抗措置として、こうした闘い方によって突破しようとする傾向が助長されたのだと思う。私たちのアラブへの出発以降、国内の弾圧は、さらに強化されていた。

森指導部はこうした困難に対して、革命左派・京浜 安保共闘との共同を進め、武装闘争で一致し、統一し て闘うことによって勢力を拡大し、活路を見出して行 こうとしたのだろう。私たちが「国際根拠地論」に沿 って、パレスチナに活路を求めたのと比べて、森指導

部はそれよりも国内建軍・国内路線を重視し、その方法として、M作戦による軍事活動と「革左」との統一軍形成による新しい闘いをめざしていたのだと、今から捉えることができる。

その分、よど号グループやアラブに行った者たちへの結合や働きかけが切実に継続的に行われることはなかったのだと思う。または、国内の激しい権力との攻防は、そうした目の前の闘いに精一杯で、思いはあっても外と頻繁に連絡し合うことができなかったのかも知れない。

ベイルートに居た私たち (バーシム奥平と私) は、 焦っていた。これまでなら、会おうと思えば1日で会 い、また、電話ですぐ連絡できた。しかし、ベイルー トと日本の間は、手紙の往復に1ヵ月程かかるうえに、 直通電話は当時はない。申し込み電話は一時間近く待 たされる上、盗聴されるし、高額で使えない。

こうした中でも、当初は赤軍派にせっせと手紙で報告し、赤軍派森指導部の意向を受けた活動をめざしてきたが、埒が明かなかった。PFLPは、ボランティアとして様々の分野で受け入れ可能であることが分かったので、軍事的分野の人材も医者も送ってほしいと国内に伝えたが、それに関する返事はなかった。

最初に来た手紙は、71年5月か6月頃で、やっと 手紙が来たことを大喜びして、その要求に応えようと 英訳して走り回ったものだった。その手紙はPFLP のハバシュ議長宛に"世界で関っている反帝勢力の代 表者による国際会議を赤軍派とPFLPで共催し、世 界に呼びかけよう"というものだった。どのような政 治原則にもとづいて、何を共同支援することができる のか?と、当初から問い合わせていた懸案の赤軍派 とPFLPの共闘のための合意づくりには返事がな かった。こちらの問い合わせには触れられず、"赤軍 派とPFLPで共催する国際会議"と話が大きい。し かし、それを、実際どう実現するのか何もないものだ った。今から考えると、PFLPと共闘のための合意 というのを、反帝グループ党の代表者の国際会議と返 答してきたのかもしれない。

十万人以上もの組織員を有する解放運動組織に対し、数百人にも満たない赤軍派が、意気だけは高く、国際党派闘争とは……中身もないのに。そうした風潮を私自身が持っていたのは棚に上げて、国内赤軍派指導部を批判的に見た。

それでも私とバーシムは、国内赤軍派の意向に沿ってPFLPに要請し、PFLPハバシュ議長から7月次のような手紙を受けている。これは、発表して本に

載せるために送ったものではなかったが、発表された。 以下は、共産同赤軍派(日本委員会)へのPFLPハバシュ議長からの手紙の一部分である。(「アラブゲリラと世界赤軍 1971年京都大学出版会」より。)

「同志たちへ。少し以前受け取った私あての手紙と『アラブの同志たちへのメッセージ』に対し、私はPFLPを代表して、感謝の意を表したいと思います。私はあなた方の手紙に対する返事が遅れたことをお詫びしなければなりません。しかし、きっとあなた方は、われわれが非常な困難に直面しており、そのために、一定の任務を遂行することさえ難しくなっていることをよく理解してくださることと思います。同志たちに感謝の意を述べるちょうどこのよい機会に、私はファッショ的反動勢力がヨルダン人民に血に飢えた虐殺を行いはじめた、1970年9月以降のパレスチナ闘争がどのように展開したか、簡単に説明しておきたいと思います」として、70年内戦以降のPLOのアラファト路線を批判し、危険が迫っている71年夏の状況を説明している。

そして、「われわれは、プロレタリア国際主義と反 帝的団結によって、われわれの共通の敵を打倒できる であろうと強く確信します。われわれPFLPは、全 世界の何百万もの進歩的人民がわれわれを支持し援 助していることをよく知っています。そして、このこ とは、革命軍兵士が闘争を貫徹する際、実に大きな励 ましとなるのです。兵士たちは本当にそうなのですが、 ベトナムやラオスやカンボジアや日本やその他どん な所であれ、帝国主義に対決し闘っている同志たちの どんな勝利にも、幸運にも歓喜しています。(中略)

最後に私がお答えしたいことが一つ残っています。 それはあなた方から提案された世界の実際に帝国主 義と闘っている党・グループの代表会議を持つという ことについてです。全PFLPはこの会議の開催を心 から支持し、それに参加する用意もあります。われわ れはこの会議を率先して開くことを望んでいますが、 ご承知のように、現在のわれわれの任務と仕事は、こ のことを非常に困難にしています。

しかしながら、われわれは、この会議を開催するためのあらゆる可能な助力を惜しみませんし、またこの会議の実現を首を長くして待っています。共通の敵と闘っておられる全ての同志たちに戦闘的あいさつを送ります。そして、闘争の成功を切に祈ります。

同志として。 PFLP書記長 ジョルジュ・ハバシュ」 バーシムはすでにレバノン南部戦場で活動していた。当事はまだリッダ闘争の前で、レバノン南部戦場では、軍事局もアウトサイドワーク局の一部も駐屯し、助け合っていた。その中から選抜されて特殊部局「アウトサイドワーク局」での活動を進めようと計画していた。そして、国内赤軍派に人材の派遣を求めたが、戦士のボランティアについても返事のないままにあった。

そうした中で、私の個人的友人がレポや財政的に支 えてくれたり、また、バーシムの全共闘時代の仲間た ちがバーシムの要請に応えてくれていた。赤軍派の協 力が得られない分、こうした力に依拠しながら、ベイ ルートでの活動を続けざるを得なかった。

私はPFLP情宣局ボランティアメンバー、バーシムは軍事ボランティア義勇兵として、活動の目処を立てていた。

ちょうどその頃、カンヌ映画祭の帰路ベイルートに立ち寄った足立・若松監督の希望で、6月から8月、パレスチナのドキュメンタリー映画制作が行われていた。この撮影のため滞在したパレスチナ・ゲリラの基地であるジェラシの戦場は、指揮官がちょうど私たちに下山命令を出した後ヨルダン軍に包囲され、71年7月下旬に壊滅した。このジェラシ山岳地帯は、70年内戦以来停戦合意として許された、パレスチナ・ゲリラの武装駐屯基地であった。そして、多くの戦友がヨルダン当局に殺され、また、逮捕された者は縛り首で晒された。その絞首刑の写真が、日々新聞の写真の記事になった。

この命がけの戦場をめぐって撮影されたフィルムは、後に、「赤軍-PFLP世界戦争宣言」として、上映運動によって全国で上映されることになる。そして、この映画の日本での上映に向けて、パレスチナ解放運動の宣伝のために、PFLP代表が日本に派遣された。はじめてのPFLP同志の公然とした訪日であった。

また、一方、日本からアラブに届いた「赤軍ーPFLP世界戦争宣言」のフィルムは、難民キャンプで上映された後、アジア・アフリカ連帯の専門家のKさんと中国に留学するPFLPの一団との話し合いで、中国で周恩来にこのフィルムを見せようという話になった。そして、中国へ一時持ち出した。しかし、周恩来のその後の感想結果について、私は聞き漏らしたままになってしまった。

後に私は知ることになったが、PFLPのアウトサイドワークに選抜されたバーシムは、パレスチナ領内、イスラエルの調査要請を打診された。赤軍派とは折り合いがつかず、バーシムの仲間(リッダ闘争後に、VZ58を名乗る人々)たちが、その任に当たることになった。当時「アラブ・ボイコット」と言って、アラブ諸国がイスラエルを承認していないため、イスラエル国内に入国した形跡のある者は、アラブ諸国に同じパスポートでは入国できない。さらに情報漏れの危険もある。そのため、彼らをアラブに呼び寄せてから、イスラエルに調査に入るのは難しい。また、バーシムが京都の仲間と意志一致するために帰国すれば、別件逮捕でやられて再びベイルートに戻ることができないだろう。そんな訳で、限られた人間が関わって、持ち回りで準備を進めていった。

私の方は、ちょうど映画作りやジェラシの厳しい戦場での攻防を経験し、またジェラシ陥落後のアンマンへのレポなどやっていた一方で、バーシムらの活動は非公然に進められた。

3、71年アラブでの出来事

71年のいくつかの出来事に触れておこう。

1) バーシムの友人たち

バーシム奥平は、PFLPの軍事的部署で、水を得た魚のように、砂漠の風のように、毎日が楽しそうだった。時々会う彼は、アラビック・スタイルが性に合うとまわりに居る人たちの話を活き活きとして語った。口数の少ない人なのに、陽気で多弁だった。「日本で見た『ケマダの闘い』が、原題の『戦争を売る男たち』として、ベイルートのハムラ通りの映画館でやっているから見に行こうか?」とか、南部の戦場から休暇で来ると、休暇を楽しみ冗談も多い。私が日本人会の友人たちの楽しい失敗談を語ると、ククククと、声をあげずに身体中で笑う。

彼の親友は、アフリカ人のサミールで、いつもバーシムに付いて会いにきた。オープンカフェでも、彼は 作戦経験のエピソードを陽気に語る。彼の話は上手で 面白い。アフリカのエリートで、英国育ちだからキン グスイングリッシュだ。

こんな話をする。70年のハイジャックの時の話。 ロンドンから、ライラたちと4人で、二組に分かれて、 エルアル、イスラエル機のファーストクラスに乗る計 画だった。しかし、サミールたちは満席と断られて、 結局、ライラとパトリック組だけしか乗れず、2人で

搭乗し、作戦を行った。後に判ったが、パトリックは機内でイスラエル兵に射殺され、ライラも逮捕された。 手榴弾の不発もあったし、当初の計画どおりの4人ではなく、2人での制圧はやはり難しかった。イスラエル保安隊は躊躇なく銃撃し、乗客も負傷した。イスラエル保安隊に制圧された後、拘束されたライラの前で、イスラエル保安隊は、パトリックの頭に銃弾を打ち込んで、殺した。ロンドンに飛行機が引き返したために、負傷したライラはイスラエルに連れて行かれず、英当局の措置で、飛行機から降ろされて、命拾いした。

イスラエル機エルアルに乗れなかったサミール組は、次の行動を決断した。アメリカの飛行機パンナムを乗っ取ることだ。すぐに迅速な行動を開始し、搭乗に成功した。そして、パンナム機が離陸しようとした矢先、ライラたちの乗ったエルアル機の乗っ取りの失敗で、ロンドンヒースローは大騒ぎだったらしい。乗客の荷物の再検査が始まった。特にエルアル機に満席だと断られた2人組が怪しい。英国の保安隊が乗り込んできた。万事休す。ベルトの間に隠していたピストルを前の席の背中になる目の前のポケットに放り込んだ。救命具の着け方の説明書の下の方にピストルが見える。

保安員が来た。身体検査と手荷物の検査を始めると、 隣の座席の老齢の英国婦人が「私の若い友人に何をするの! いいかげんになさい」と抗議してくれた。サミールは特に老人や子供にやさしい。彼のいつもの行いが彼を救ったらしい。彼はこの見ず知らずの老齢の婦人の荷物を持ってあげ、話をしながら、連番の座席になっていた彼女の手荷物を棚に入れたりしていた。これはいつもの彼の性格だった。婦人は親切にされたのがうれしかったのだろう。

老婦人がたしなめたためか、保安員はサミールと友人の検査を終えると去っていった。座席のピストルはそのまま気づかれずに。それから、パンナム機が飛び立って15分ほどして、ピストルを取り出して、作戦行動に入ったのだが、老婦人は呆然としていたという。「サンキュー」と言うと、老婦人は、呆然と「ユーアーウェルカム」と答えたと言う。サミールはこんな話をいくつも語る。いくつもの作戦の話をしてくれた。自信家だったが、また、実力があった。

(その後、このパンナム機はヨルダンの砂漠の革命 飛行場に着陸した。当時、こうしたエピソードは、公 開されていた。また、当時、ハイジャックは有効な戦 術としていた時代なので、反省はあるが、当時の雰囲 気のままに、私もここに記した。) バーシムの親友には、他にもイスラエルの拷問によって水晶体の液を抜かれたために「めくら」になっているユセフも居た。彼はサミールとなら、眼が見えないと思わせない迅速さで、射撃もこなすという。

こうした戦士たちと暮らしていた。

2) 盗難事件

当時、私は繁華街ハムラ通りから一筋アメリカン大学寄りのロケーションの良い2階にある、小さなスタディオ式のアパートを借りていた。アパートのコンシェルジュ(管理人)は、北部トリポリのナハレル・バルド難民キャンプに住んでいたパレスチナ人夫婦で、その弟はPFLPのシンパだと言う。難民キャンプの出身の20代のイーサとアハマッドの2人が下働きをしていた。PFLPは私に71年4月からこの住居をアレンジしてくれていた。

5月のある日、部屋にかけてあったカバンに入れたパスポート、現金、スイスエアーの帰国用のチケットが外出中に消えた。持ち歩かずに、ちょうどバーシムと出かけて戻った時だったので、落とすこともない。確かに部屋に置いておいた。二人で確認している。部屋には鍵が掛かっている。

下働きの者たちの仕業に違いない。けれども証拠もない。下働きのイーサというパレスチナ人に、「私はパレスチナに連帯するために来た。日本政府の意向に反対してきたので、旅券は再発行されるかどうかわからない。金は要らないが旅券を返してほしい」と、静かに言った。彼は「知らない、知らない」と言い返し、「でも、旅券は出てくると思うよ」と言う。彼らはよく働くし、憎めないところがある。貧しさが良くも悪くも逞しく人を育てる典型のような若者だ。

仕方なく、すぐに日本大使館に紛失届を出し、日本 大使館の現地職員と共に、警察署にも盗難届を出した。 スイスエアーにもチケット再発給手続きをした。

大使館は「再発給には2週間もかからないよ」と言っていたが、本省から返事が来ないとずいぶん待たされた。再発給を阻止しようとする動きがあったようだった。書類は揃っているのにおかしいと、大使館員が言っていた。ちょうど、足立、若松さんらが映画を撮りに来たので、通訳案内人として私が行くのに、早くパスポートを発行してくれと私も催促し、また、大使館からも本省に何度も問い合わせてくれて、やっと再発行された。

一方、私の方には、紛失後1週間近く後に、スイス エアーから電話が入ってきた。「『ミセス・オクダイラ のスイスエアーのチケットと旅券を拾ったので、返却したい。明日、下町の広場に面したシネマ・リボリ(大きな映画館のひとつ)の前で待っていてくれ』という電話が入って、あなたに伝えてくれと言うことだった。おかしな電話なので、警察にも通報しておいた」という。そのうち、007の主人公のようにハンサムな男たちが数人私の部屋に乗り込んできた。そして、話を聞いているうちに、部屋を検査し始めたので、「何よ!私は被害者じゃないですか!」と言うと、「いや、パレスチナ問題のPLOリサーチセンターの本が多いので」と言う。「パレスチナ問題を研究するのは悪いのか?」と聞くと、「いや、それはない」と濁した。

そして私に、「明日、我々は犯人を捕まえるので、協力してほしい」と言う。私に、シネマ・リボリの前に立ってほしい。話しかける男が居たら即逮捕する。30分待って、もし現れなければ、そこから10メートルほど歩いた場所に移動して、セルビス(乗合タクシー)に乗って帰宅するようにとのことだった。

私は、007のような人々の訪問に、このビルの犯人たちは、これでは現れないだろう……と思ったし、また、パレスチナ人を逮捕させるのは良くないな……と考えた。それで、こんな風に提案した。「わかりました。でも、刑事さん、ご存知のようにアラブの男たちは若い外国人女性には"お茶飲みませんか"と、たくさん寄ってきますよ。ただそれだけで寄って来たのに、飛びかかって拘束しては、犯人を逃がしてしまうでしょ。私は首にスカーフを巻いて行きます。私が首からスカーフをはずしたら、その男を捕まえるという風にした方がいいですよ」と言うと、そうしようとシナリオを変更してくれた。私は、もし、本当に誰かがパスポートを返してくれたら、スカーフははずさないつもりだった。

こうして翌日、シネマ・リボリの前に立ったが、犯人は現れなかった。それも道理なのだ。シネマ・リボリの前に立って驚いた。私から見ても張り込みとわかる、私服、制服が50人以上私をじっと見ている。これでは犯人も近づかないだろう。こうして、一日目は失敗に終わった。

また、何日かして、スイスエアーに電話が入り、日付と時間を指定してきた。再び007が登場して、また、作戦を練り体制を取ったが、犯人は現れなかった。その時には、帰りの乗合タクシーの乗客が、「何かあったのかな。おまわりが多い」と言うので、タクシーの外を見ると、乗合タクシーは、要人の護衛のように、白バイ3台が前後を固めていた。そして、私が降りた

アパートの前で、乗合タクシーの乗客全員を一時拘束 してしまった。その中に犯人が居るとでも思ったのだ ろうか。余りに派手な振る舞いに、私もうんざりして しまった。何ごとかと私のアパートのコンシェルジュ も出てきて、その様子を見ていた。イーサと目が合う と、彼は目をそらした。その後、旅券は戻らなかった が、再発給を受けた。

その頃、私のアパートの上の階に、若松・足立組を紹介し、2人も家具付きアパートの住人になっていた。そこを拠点に、シリア、ヨルダン、レバノン南部へと映画制作活動が始まった。ベイルート市街の撮影を最後に終えて、足立さんが出発する前日の夕方のことだった。近所の土産物屋に買い物に出ようとすると、「どこに行くのか?」と、イーサが聞いた。「お土産買ってくる」と、私と足立さんが答えた。土産物屋に入ったところで、手早く買い物を済ませると、足立さんはもういいや、戻って打ち合わせをしようという。

予定より早く戻ると、イーサが驚いたように、「早いね!」と言ったと同時に、大声で、もう一人のアハマッドの名を呼んで、「イジャ、イジャ」「エリジャ、エリジャ」と、大声で、階上に向かって叫んだ。「来た、来た」「戻った、戻った」という意味らしい。イーサが私に話しかけようとする。変だ。

ポンコツエレベーターに乗って、足立さんの部屋に 戻って、私は見回した。「何か変じゃない?」ジーン ズの長いズタ袋みたいなバックに、せっかくきゅうき ゅうに荷作りを終えていたのだが、「もう一度荷物を 検査した方がいい」と、私は足立さんに言い、彼が上 から荷物を開けはじめた。彼の作業用のテープレコー ダーがやられていた。ジーンズを巻いてしまいこんだ テープレコーダーの代わりに、週刊誌がその厚みの分 巻いてごまかしてあった。「あいつら! もう許せな い!」とわめいたのは私。内線の電話はコンシェルジ ュ室のイーサに繋がる。受話器を取り上げると、「イ ーサ、泥棒! 悪魔!」と、怒鳴りつけた。「前回は警 察に言わなかったけれど、今回は許さない」と。

イーサが慌てて部屋に来た。盗んだもう一人のアハマッドがテープレコーダーを持って、イーサの後ろに来た。イーサはテープレコーダーを掴むと、足立さんに返しながら「ハラス、ハラス、マレシ」(「終わり、終わり、気にすんな!」の意味)と言うではないか。私はますます逆上して、腹を立てた。「イーサ!お前みたいな奴は恥だ!パレスチナのフェダイーン(解放闘争の戦士の意味)と同じ民族とは信じられない」と、怒ったが、彼らは「アッフアン(ごめんなさい)」と

は言わなかった。私は「警察を呼ぶ」と言ったのだが、 足立さんは「もういいよ。出てきたから」と言うので、 それ以上にことを荒立てなかった。結局、警察に突き 出しても、誰も幸せにならないし、解決にもならない。 イーサは、私の怒りのパレスチナ解放闘争の説教に、 最後に、「アッフアン」と言ったけれど。

前に、旅券を取られた時にも、バーシムとサミールは、PFLPとして尋問すべきだと、私の同意を求めていたが、パスポートを入手できたので、そうしなかった。そして、私はそのまま撮影で、シリア、ヨルダンと走り回ってきた。今回もバーシムたちに話をした。やっぱり、イーサたちだった。今度は証拠もつかんだと。

ちなみにイーサの名は、イスラム教徒にもキリスト 教徒にも共通した尊敬される名前のひとつで、イエ ス・キリストのイエスの名である。アブラハムはイブ ラヒム、モーゼはムサ、マリアはマリアムのように。

3) アンマンへの旅

1971年7月、パレスチナ解放のヨルダンにおける最後の軍事拠点、ジェラシ山岳地帯が陥落した。1週間にわたる最後の戦闘の末、ヨルダン軍2万5千に立ち向かい、弾を打ち尽くして、戦士たちは投降せざるを得なかった。

凶暴なヨルダン兵は、拘束後、PFLPの人々を絞 首刑にして、「戦果」を公開し、新聞には毎日かつて の戦場の友人たちの吊るされた写真が載った。「もは や、ヨルダンにはパレスチナゲリラは一人も居ない」 と、ワスフィ・タル首相は豪語した。当時、アル・ハ ダフ事務所に居た誰もが気が気ではなかった。PFL Pの仲間が日々殺されていた。

ガッサン・カナファーニが私に、「我々はヨルダン に入ることができない。誰が殺されたのか?何人生き 残っているのかも判らない。その後のことも。こちら の意志も伝えたいので、レポに行ってくれないか」と 言う。私は二つ返事で引き受けた。レポの中身はわか らない。でも、役にたてるなら嬉しい。ただ、それだ けだった。急いでヨルダンへと向かうことにした。

絶対に取られてはならない手紙を、ガッサンから受け取った。アル・ハダフのメンバーの一人Bさんの実家は、ヨルダンの金持ちですぐわかるから、そこに行って、Bさんの弟を呼び出すことにした。まだ高校生だと言う。そうしてある人の家に連れていってほしいと名前を告げれば、必ずやってくれる。それが秘密に接触する方法だった。

こうして私はアンマンへのレポに出発した。シリアのダマスカスから乗ったアンマン行きの小型バスは、ヨルダン国境で、すべての荷物を一つ一つ検査されて、それだけで3時間以上もかかった上に、何人かは殴られ、何人かは拘束され、何人かはバスに戻って来なかった。シリア国内では、陽気に騒いでいた乗客は、歌ったり、喋ったり、ラジオアシファ(カイロからのファタハの放送)に合わせて浮かれていたのに、ヨルダン国境で押し黙った。

やっと国境を越えて、高速道路に入って、運転手が 再びアシファをつけると。「やめてくれ! 俺だって聞 きたい。でも、今は安全にたどり着きたいんだ」と乗 客の一人がいうと、沈黙が続きラジオは消された。途 中、ヨルダン軍による検問は何度もバスを止めて、身 分証の点検をくり返した。

私の隣りに座っていた、アメリカから里帰りするというパレスチナ人は、酒を飲みだした。そして、検問のたびに寝たふりをし、検問が終わってバスが走り出すと、「パレスチナなんて養食らえだ」と泣いていた。そばの婦人が私に語りかけた。「誰も自分の故郷に帰りたくないわけじゃないのよ。帰りたい。それでもなぜこんな仕打ちを受けなければならないのか……。」

そんな旅は、早朝に出たダマスカスから、夜になっ て、やっとアンマンに着いた。いつもの2倍の時間が かかっていると言う。

私は、アンマンですぐ行動を開始した。小高い金持ち地域にあるBさんの邸宅を訪れた。そして、弟の手引きで、無事に仕事を終えて、数日後にベイルートに戻ってきた。 (つづく)

読者からの声・

*無事手術が成功し、喜んだのも束の間、また腫瘍マーカーが上がったとのこと、心配ですが、病との闘いも革命家としての人生でしょう。推定無罪の未決暮らしの人権無視は許しがたいものです。

私も若い時、2度の拘置所生活で、非人間的扱いと 関った経験がありますが、重信さんのご健勝を。

6月25日

宇治市 T.Y.

*体調心配しております。無理をなされないよう。 7月23日 藤枝市 H. I.

*いつも送っていただき感謝です。

8月4日

西東京市 K. G.

*カンパ送ります。第91号が発行される頃には、この国の衆議院は新たな議員構成になっているのでしょうね。「民主党ひとり勝ち」が予想されますが、「新憲法制定議員連盟」や「日本会議国会議員無談会」や

「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」などの 改憲論者が増えてしまって、恐ろしい気がします。 9 条改憲阻止闘争もいよいよ正念場ですね。

8月10日

大阪市 T.M.

シゲに捧げる「私小説」その78

山田 美枝子

シゲ、あなたが2000年の11月に突然テレビの画面に捕らわれの身として登場して、私を驚かせてから、もう9年になろうとしています。裁判所の傍聴席、そして拘置所の面会室で会うだけですが、置かれた状況は考えないことにして、いい年のとりかたをしていると、友として思うのは、変でしょうか。でも顔に表情に人生が表れてますから、私は敢えてそういいます、シゲ、いい顔になってます。さて日本の経済の高度成長期に私の夫は疲れきり、オーストラリアへの移住を考え、永住権を取得した時期がありました。その頃のオーストラリアへ移住した日本人の話を書きました。

レナは浅黒い百七十二センチの細身の身体に色あせたTシャツをだぶっと着て、パンツも色あせた夫のお古ではないかと思わせるいつもモノトーンのものをはき、素足にサンダル、それも男物を履いている。しかし日本では、もと売れっ子モデルだっただけに、黒い瞳に鼻筋が通った顔は、そんな色褪せた格好をしていても人目をひく美しさだ。オーストラリアに移住して五年、二十歳年上の夫剛志に今、思い切り悪口雑言でなじられている。

「出て行け、さっさと荷物まとめろ、てめえなん かいなくたってかまわない、いやぜんぜんおれの家 にいる必要ない、頼んだ覚えなんかないぞ、おれは いつでも一人で生きてきたんだ、分かったか、うる さいこといわれたくないんだ」

肺がんの末期の剛志は、治療薬に用いられるステロイドの影響もあり、連日にわたり、レナを怒鳴り散らしている。しかし彼女は泣かない、後ろ向きでキッチンのシンクの中の野菜を洗いながら自分の細い手を見つめ、初めて出会った頃の剛志のことを考えている。今は病気のせいで痩せ細り、目に異様な攻撃的な輝きを増して怒鳴り散らしている彼が憐れ

でならない。オーストラリアの病院は癌の患者であっても、オペが済むとすぐ自宅に返す。そして朝夕ドクターとナースがペインコントロールにやってくる。無駄な延命治療はしないらしい。こちらの国は愛犬でも、年老い食事も取れず歩くのも困難になった犬など、飼い主が延命治療に連れて行くと、獣医の判断優先で、これ以上生かすのは飼い主のエゴだと判断されると安楽死のための睡眠剤を打たれてしまう。

オーストラリア南西部の街、パースで、スワンリ バーを背景に、レナはカメラマンが雰囲気つくりの ために発する嘘くさい浮ついた言葉に気だるく微笑 んでいた。

「いいよレナちゃん、きれいだ、そのまま空を見上げてて、右手はもう少し、乳首すれすれに下ろして、そうそうきれいな足だよ、つま先伸ばして」

レフ版をもった照明係の天野君ハーフパンツの足の脛が汗で光っている。モデルのあたしは、カメラマンの言葉に気持がだんだんハイになっていく。あたしの長い髪がリバーからの風で顔に絡みついた。 化粧品のバッグをかかえたサトちゃんがかけよってきた。

パースの町は透明感のある光で満ち溢れ、レンガ 造りの家々も木々も花も人々の服も明るすぎる透明 感のなかで、浮き上がって見えた。

南半球のここは一月だというのに真夏なのだ。日本を出るときは、寒風吹きすさぶ大晦日の夜便だった。しかしカンタス航空に乗り込み、機体が九千メートル上空で水平飛行になり、安全ベルトがはずされ、にこやかなオージーの客室係が周ってくるとあたしの日本での緊張感はとんでしまった。そして配られるオーストラリアワインが食道を通過すると同時にあたしの全身から力が抜けた。

(つづく)

お知らせ

柳田健氏、西浦隆男氏ら「政治犯に対する不当な弾圧に反対する会」が5月末以降、大下敦史氏の協力を得るなどして展開している、西川支援・冤罪判決批判、協力・カンパ(口座名「西川支援の会」など)の呼びかけは、私や弁護人の意志・意向とは一切関係ありませんので、その点、ご留意ご注意ください。

「会」に対して、従前の活動の是正、関係の一旦のリセットを7月2日付で申し入れましたが、期限の7月15日までに回答がなく、止む無く「お知らせ」として告知することにしました。

(旧日本赤軍関連事件、西川純)

西川さんより上掲の「お知らせ」を『オリーブの樹』に掲載してほしいとの要請がありました。

今年の初め、西川さんはMさん(や「政治犯に対する不当な弾圧に反対する会」)に、パレスチナ人T氏の証言を取ってきてほしいと要請しました。これまで、旧日本赤軍救援に要請していたが、実現できなかったためです。西川さんは上告趣意書を作成中で、その中の証言としてT証言を必要としていました。弁護人と公判方針を決めながら、公判に使うものとして依頼しました。

「反対する会」の方では、西川さんの冤罪を晴らすためには、広く大衆的に世論を形成し政治キャンペーンを強化して、裁判所に圧力をかけるためにT証言が必要ととらえていました。(柳田さんの文書などにそのように書かれています。) こうした違いをきちんと確認し得ないまま、Mさんは西川さんの希望に沿って、ヨルダンに行き、T証言を取ってきてくれました。Mさんのこの渡航には、西川さんは100%感謝しています。

ところが、そのT証言を、Mさんは公にしないというT氏との合意を反故にし、また「反対する会」は西川さんや弁護人の諒解もなく、公判以前に公表し、情宜に使いました。

西川さんは、7月2日付で提案を行い、そうした行為を止めてほしいと要請しましたが、受け入れられなかった ので、上記「お知らせ」の表明に至ったというのが、西川さんとの文通などで私の知り得た経緯です。

本来ならば、これまで、「反対する会」に紙面を提供してきた媒体に載せるのが妥当と思いますし、『オリーブの 樹』に載せても、読者には意味不明の方もおられると思います。でも、西川さんは拘留中の制約で表現の場も限ら れているので、編集室とも相談し、若干の説明を付け掲載しました。

反弾圧の一点で、団結が育つことを願ってやみません。

(重信房子)

後記

重信さんは、一時は手術前よりも高かった腫瘍マーカー値が下がりつつあるようでほっとしている。

今年の8月は、核兵器関連のテレビや新聞の報道がことのほか多かったように思う。4月のオバマ大統領の核兵器廃絶に向けた演説の影響だろう。「米国は核兵器を使ったことがある唯一の国として行動する道義的責任がある」を、友人は「火の粉がかかりそう、核兵器の被害国になる可能性に気づいての発言」、「さんざん作っておいて。しかし評価する」と苦々しく言い高評していた。作って人を殺して反省して。人類はなんと愚かなことか。報道で核保有国の中からよくイスラエルが抜ける。核兵器の前ではイスラエルもイランも北朝鮮もない。全人類が運命共同体であることをオバマ氏は忘れないでほしい。

8月末の衆議院選挙結果。なぜか4年前の小泉劇場を思い起こさせた。かつての野党は共同して表層雪崩にしないでほしい。正確には中断があったが、64年間も対抗馬を作らなかったこと、その被害を受けるのは自分であると気づいた多数の選択なのだから。 Q

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋 2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三并住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格 500円

「正誤」表

第91号

- ①8P(8/4)右上から22行目 80 近くの→90 近くの
- ②16P左下から5行目
 - ~パンナム機はヨルダンの砂漠の革命飛行場に着陸した。
 - →パンナム機は、<u>カイロの国際空港に着陸し破壊した。</u>